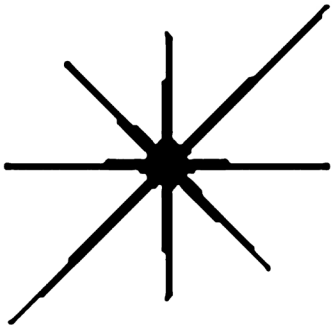
コメット通信 10

［’21 年 5 月号特別付録］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱（4）
――「ブラック・ノート」抄

中村邦生

23 「喫茶店にて」

（14 冊目，21-23 ページ）

すでに述べてきたように，『ブラック・ノート』の断章をあらかじめ順番を決めて読んでいるわけでもないし，かといって気まぐれに拾い読みをしているわけでもない……，と書いたとたんに，むしろこの両方が混淆しているような気もしてきて，読み方をめぐる自意識が空転してくる。

ノートの方が意志を隠し持っていて，折々に私の気分を察知し読むべき話へと誘導しているのではないかと疑ったりもするのだ。私の関心を先回りして，あるページの文に目の留まる瞬間を待ち構えているのかもしれない。なぜ今ことさらに，こうした思念に捉われてしまったのかの理由は明白で，ある喫茶店で笠間が経験した逸話に遭遇したからだ。私自身の体験と相似しているのである。ただし，先に体験談を読んだので思念が後付けで動き出した可能性もあり，事態は錯雑としてくるが，あまり深追いせずに，とりあえず全文を記す。タイトルは付いていなかったので，「喫茶店にて」としておきたい。

「喫茶店にて」

ある秋の平日の午後，住宅街の一角にひっそりと営業している喫茶店での小さな出来事。海岸リゾートによくある白塗りのデッキを持つ開放的な造りだが，照明が控えめで落ち着いた気配が漂っている。深緑のビロード張りの椅子が揃い，カウンターの背後の壁には色とりどりのコーヒーカップの並ぶ棚があって，客は好きな器を選べる。退色した薔薇の造花がトイレに向かう通路に飾ってあるが，埃をかぶっているわけではなく，掃除はいつも行き届いている店だ。

喜寿は越えている店主が一人で対応しており，豆を挽く段階から時間をかけて用意するコーヒーの味は確かなもので，「珈琲」と漢字表記がふさわしい苦みと強い香りがする。

時代小説の名手だった作家の S が散歩の途中にしばしば立ち寄り，いつもガテマラを注文したと聞いたが，はたしてどうなのか。喫茶店で新聞をに目を通す習慣だった人だが，この店には『太陽』のバックナンバーしか置いてない。

その日，私はいつものとおり窓辺の隅の席に座った。他に客はいない。なぜかこの店に入ると，パソコンを開くことには躊躇するものがある。おそらく閑散とした雰囲気のせいかもしれない。ほどほどにざわついていないと，キーボードを忙しく打つ音が気になるものだ。そこで私は知り合いの編集者から依頼された写真論の校正を始めたのだが，頻繁に電子辞書を使う意外に手間のかかる作業となった。気づくと 80 分ほどたっている。眠気もどんよりと広がり始めたので，カウンターで本を読んでいる店主に声をかけた。

――コーヒー，もう一杯，お願いします。マンデリンで。

店主はこちらを見つめたまま，何やら労りに似た表情を浮かべて言った。

――ムリしなくていいですよ。

私は言葉を失い，応じ方にとまどった。

――はい，じゃ，ムリせずにやめます。
とは，答えられない。
――いえ，おかわりをしたくなったので。
　正直に言ったものの，陰気くさい気分のざらつきがあった。不快感にまでは至ったわけではない。店主は気を遣ったのだと思う。それは理解できる。一人も客がいない店で，きっとこの人は長居に気が咎めているな，と察したのだろう。すると案の定，コーヒーをもう一杯くださいと注文してきた。予測は当たり，ムリしなくていいのですよ，と気遣った。
　しかし，私にすれば，待ち伏せにあったようなものだった。気遣いなど不要で，煩わしい。こうした先回りした配慮の言葉は，むしろ配慮に欠けた対応として裏目に出てしまうことがある。日常のやり取りでよくあることに違いない。私がさぞかし長居を気にしているだろうと推測して発した，「ムリしなくていいですよ」の過剰に気を回した店主の応対は客を当惑させるもので，仮に「ムリ」をしていることが事実でも，やり過ごし，とぼけて，「ムリ」を素直に受け取ればいいだけのことだ。いや実を言えば，私自身にしても多少気を遣って追加のコーヒーを頼んだ面がないこともなく，妙な言い方だが，それを意識の表面に引っ張り出されてしまった居心地の悪さが，なんとも煩わしい。
　こうした状況の持つコノテーションをわざわざ顕在化させてしまうと，意味伝達の不調を招く。長居という事実に，店主の注意と意識が向いていたことが図らずも明らかになってしまい，それによって客自身も自覚的にならざるを得ず，こうした店には来たくなかったという気分に逢着し，そう感ずる自分が疎ましくなり，何か行き詰まり感に陥っているように思ったりする。つまるところ，不本意な自分の反応に不快感を抱いているだけのことかもしれない。
　こんな単純な事実だけでも，人間の感情は拗れ，捻転したりする。先回りして気を配ったことが，相手の無意識を自覚化させて，むしろ窮屈な場に追い込み，皮肉にも心理的には後手に回ってしまった。こうした待ち伏せの言語行為は，前と後，先取りと遅れの意識が混乱し，失調を招く事態を内実としている。それでいながら，何気なく流通している事例が多いのは，安堵すべきことに違いなく，深刻なような滑稽なような日々の現実の喜劇的側面なのだろう。
　ロイヤル・コペンハーゲンのカップに入った二杯目のコーヒーを飲み終わり，伝票を持ってレジに近づくと，店主は読みかけの『鏡花紀行文集』の文庫本をカウンターに伏せて，猫背の痩躯をゆっくりと運んできた。
「おいしかったです。また来ますね」
　私は釣銭を受け取りながら言ったものの，ふたたび店に来ると考えていたわけではなく，勝手に口から飛び出した言葉にすぎなかった。多くの会話は，考えてもいないことが不意に口からこぼれるものだと冷静に振り返るより先に，私は店主の途惑いの表情が気になった。眼鏡越しの奥の柔和な眼差しが宙に浮いている。
「いつ，おいでになりますか？」
　と店主は私を見ずに，店内を見回しながら生真面目な口調で尋ねた。
「いえ，まだ決めているわけではありませんけど……」
「そうですか。実は，今度の日曜日で店を閉じる予定なので」
「えっ，閉店？　あさってですか？」
「はい，そうなります。私も来月で 81 歳になりますし，あれやこれや面倒になってしまい，もういいかと……」

店が明後日でなくなってしまうという，不意を衝かれた予告と惜別の思いがすべての感情を上書きし，今度は私のほうが店内をすでに失われてしまった場所のように見回した。気遣いの文脈を寸断する，「くたびれて，面倒になっちゃうほど，繁盛していたわけではないでしょう」などという言葉への欲望など，空中に霧散した。

「誰か後を継ぐ人はいないのですか？」

「それは，ムリです」

もはや懐かしい言葉のように，「ムリ」が胸の奥に響く一方で，自分の拘った気遣いをめぐる言語的なふるまいは後景に退いてしまった。

「ブラック・ノート」に記載された話はここで終わっている。冒頭で述べたように，これを読むことになったのは，偶然とは思えない。なぜなら，私自身にもこれと気味悪いほど重なる喫茶店での体験があるからだ。むしろ私自身が書きそうな文章ですらある。ノートに店名は書かれていなかったが，私の知っている店は「アレグロ」と言い，ウェッジウッドの器を使い，紅茶のときはロンドンのキューガーデンの植物柄のティーカップが出てきた。ときどき立ち寄ったらしい作家は藤沢周平なのだが，私自身は会ったことがない。たぶん，誤情報だと思う。

以下，笠間保の掌編に私の話を継ぎ足し，今回はそれを〈寸感〉に代える。

ドアに向かって帰りかけると，背後から声がかかった。

「この時期，一応そこは入口専用にしているんです，でも，お急ぎでしたらいいですよ，どうぞ」

「いえ，急ぎません。出口はどちらです？」

トイレに向かう方向の脇に，食器棚の壁の背後に回り込むようにして通路があり，突き当りのドアに「出口はこちら」と大書した張り紙が目に入った。外には小さな裏庭があり，ハーブの密生した素焼きの植木鉢が並んでいた。ミントのかすかな香りに，焦げたコーヒーの匂いが漂う。通路は店舗の裏から道路側の入口につながっているのだが，庭の一角に箱型の白いプランターが重なり，どれもコーヒー滓が詰まっていた。肥料や虫よけになることは知っているが，雨ざらしにして何の用途があるのだろうか。

プランターの一つに，稲穂のようにエノコログサが数本伸びていた。

私は通路を回り，ふたたび入口のドアを押した。

「いらっしゃいませ……，あっ，お忘れ物？」

店主がカップを布巾で拭きながら，戸口に顔を向けた。

「いや，もう一杯おかわりにきたというわけじゃないんです」

笑いの反応はなく，店主の真剣な面持ちは変わらない。

「ちょっとお聞きしますが，裏にためているコーヒー滓ですけど，何にお使いになっているのか，気になりまして」

「ああ，あれですか。さっさと処分すればいいのですが。放置したままじゃ，消臭剤にもなりませんね」

「いや，すいません。余計なこと，お聞きして」

私は質問の答えなど，もはやどうでもよくなり，すぐに退散するつもりだった。

「実は，亡くなった妻が，コーヒー染めをしていたんです。その材料がたくさん残ったままでして。ポプリ用の鉢もそのままで……」

「そうでしたか」
「トートバッグなんか，よく染めていましたが，今ならきっとマスクを染めたりするかもしれません」
「そうでしたか」
私はそう繰り返した。たくさん話があるような，全くないような気分が凝った。普段ならこういう場合，黙っていればいい。しかし，ふいに労りめいた思いが突き出た。
「閉店の日には，ぜひまたコーヒーをいただきにまいりますね。ごちそうさまでした」
店主に驚きのような不快なような表情が浮かんだ。痩躯に細長く青白い顔が乗っていた。眼鏡の奥の目の周りに，疲れからか陰気そうな隈もある。この人は誰だ，と改めて私は思った。向こうも，こいつは誰だと思っているだろう。言い繕って勘違いをごまかしたいと思ったがやめた。説明しようにも糸口がわからない。
私はあたふたと，しかし外目には悠然とした足の運びで外に出た。もう一度，裏庭を覗いてから帰りたいと思ったのだが，「閉店」などというありもしない予定を口走ってしまったので，早く店から離れたかった。それでも，少しは勘違いのいきさつを振り返る余裕はあった。
閉店の情報など，笠間保の文には書かれていたが，私の話とは関係ない。勝手に紛れ込んでしまい，つい混乱してしまった。書いているうちに勘違いが生じたのだろうが，笠間の経験した事実と私の経験した事実，それらを私が後から記述する現実との時系列が歪み，縺れ出し，記憶をたどる意識の視界が遮られたのだ。

24　借用と盗用

（14 冊目，24 ページ）
「喫茶店」のエピソードの書かれた次のページに，短い引用文が目に入った。コメントはなく，ただこの言葉だけが置かれている。

「二流の才能のアーティストは借りる。一流の才能のアーティストは盗む」
――イゴール・ストラヴィンスキー

用意周到な皮肉と言うべきだろうか。笠間保の文に継ぎ足しをしたばかりなので，思わず苦笑したことは言うまでもない。「一流」と「二流」の問題は措くとして，そもそも借用と盗用の関係は，どちらがどうなっているのか。私が笠間の文を引き継いだことは確かだが，それは私自身がオリジナルな体験として持っていたものだ。したがって，笠間が私の話を借用したのだ。いや，それは違うか？何やかや，わけがわからなくなってきた。しかし，どうであれ，お先棒を振る競争など醜態に他ならず，この引用はそうした浅ましい意識自体もシニカルに見ているに違いないのだ。
先の警句はどの英語版の引用句辞典にも記載されているものだ。笠間保はどの辞典を参照したのか不明だが，手元の英語引用句辞典では，次のような表現が示されている。

Lesser artists borrow, great artists steal.

ただし，この言葉はストラヴィンスキー独自のものではなく，ピカソもこう述べている。

「優秀なアーティストは模倣する。偉大なアーティストは盗用する」
（Good artists copy, great artists steal.）

さらに，T・S・エリオットにも次のような箴言がある。

「未熟な詩人はまねる。熟達した詩人は盗む」
（Immature poets imitate, mature poets steal.）

いずれの言葉も，その意味内容はほぼ同じだろう。借りたり模倣したりするのでは未熟で凡庸な才能の持ち主のレベルであり，真に優れた作り手は，借用した痕跡など一切残さず，巧みに盗んで自家薬籠中のものとして，最初から自分の創作物であるかのように見せてしまう才覚と技量があるのだ，と。どの程度〈影響の不安〉を自覚するかどうかは別として。

詳しく調べたわけではないが，これらに先立つ類似表現がもっとあるかもしれない。ただ，それがあるなしにかかわらず，またこの三様の警句の発表順とも関わりなく，新たなアイロニーを感ずることになる。ひとつは，似通った表現が存在すること自体でたがいに相殺し合い，独創的なレベルに偽装し得た「盗む」というよりも，似通った段階に留まる「借りる」という印象が強くなるということだ。もう一つは，発言した人物の仕事の先駆性やオリジナリティやカリスマ性の強弱が，「盗む」という特権的な表現の持つ説得力を決めるということだろう。表現活動の領域が異なる 3 人では，その決定を下しようがない。もっとも，この箴言そのものがはたして「盗む」を僭称するほど立派なものか否かとなれば大いに疑問の余地があり，表現がおのれ自身に差し向けられてしまう自己言及の様相こそ，アイロニーの最たるものかもしれない。

25　遺伝子のコピー

（14 冊目，25 ページ）

ストラヴィンスキーの警句の引用しかないページの物足りなさを，何かしら埋めようとする気分があったせいだと思う。紙面に広がる空白に代わる充溢した言葉を求め，次のページを期待してめくってみたのだが，また拍子抜けした。これ自体も読み手の私を誘う「ブラック・ノート」の見えない力の仕業と考えるべきかどうかは判らないが，冗談めかすように，メモに等しい単純な言葉が書きつけてある。見ようによっては，新聞の見出しのようだ。いや実際，どこかの記事の片語の可能性もある。

遺伝子のコピーミス　　新型コロナウイルスの変異株を正しく知ること

書いてあるのはこれだけだ。前のページもそうだが，続けて書こうと思案していた話があるかもしれない。「コピーミス」という言い方が何やらあやしい。しばらく字面を見つめ，沈思したところ，小さな妄念がじわりと湧いた。なぜ新型コロナウイルスの変異種が出来るのか。

まず，コロナウイルスが呼吸器などの粘膜にくっつく。するとウイルス表面の棘状のスパイク蛋白質が受容体の表面と結合する。ここでウイルスと細胞が融合して感染状態になる。

常識的な素描を臆せずにもう少し続けるが，ヒトの細胞は遺伝子をコピーするメカニズムがあるが，ウイルスはこのメカニズムを乗っ取って，つまりは借用して，自分の遺伝物質（RAN）をコピー

して増殖し，その結果，肺炎などの呼吸器障害を引き起こす。ところが，こうした装置の借用によるRANのコピーの過程でミスが起こり，遺伝子の異なるウイルスができてしまう。これが変異種となって，より強い感染力で拡散するのだ。メカニズムを借用しつつも模倣ではなく，似て非なるものに変異したウイルスだ。いわば盗用レベルに到った強力な変異体。ということは，新型コロナウイルスが，ストラヴィンスキーやピカソを演じていることになるのか。こうした牽強付会の臆説もまた，先の引用に触接し過ぎた感染的な連想で，歪んだ縮小コピーのようなものだろうか。またもや，自己言及の循環が慢性化しつつあるようで気分が悪い。

26 「砂漠で迷う」

（30冊目，14-20ページ）

笠間保の文を拾い読みし，字面に触れていると，自分の言葉が増幅してきて，新たな思いに行き当たることがあり，そうした思念にも転写と変異があるかもしれないなどと，また性懲りもなく考え始めたので，自己隔離の処置を決め，14日ほど「ブラック・ノート」から遠ざかることにした。実際は，予定が延びて17日目の夜になり，無作為にノートを開いた。どのような写真の仕事で出かけたのか書いてはないが，サハラ砂漠で道を失った経験を記した7ページほどの文章が目に入った。

「砂漠で迷う」

わざと道に迷う。ことによると，あえて道に迷うことを誇りにしている者もいるかもしれない。車を運転しながら，ふいに見知らぬ横道に入る。間違った道だなと気づくのに，それでもかまわず進んでしまう。どこを走っているか，まったく分からなくなり，しぶしぶカーナビに頼ることになるのだが，その指示が遠回りの道に思えて信用できず，結局は自分の判断した経路で進み，また新たな深みに入ることになる。にもかかわらず，何か重要なミッションを果たしているかのような錯覚が芽生えてくるのだ。白状すれば，私はそのような人間の一人なのである。

私が杉並の安アパートに戻ってくるのは1年に4カ月ほどで，ほとんど日本にいない時期もあった。一人息子とは，25年間会ってない。一度の結婚も，若き日の最大の寄り道と考えている。

学生時代，大雪山系を歩きまわるうちに道を失った経験がある。食糧が尽きかけ，不安の底にいるとき，楽園のような風景に出会った。

9月の半ば，小さな谷にまだ冬の雪が残っている。その雪渓を取り囲むように，紅葉が始まっていた。空の青を背景に，赤や黄色に染まった葉が輝き，雪に照り映えている。私は華やかな静寂を楽しんでいたのだが，突然，背後の藪がざわめいた。背筋に冷たいものが走る。覚悟したとおり熊が現われ，目と目が合った瞬間，時間が止まった。

私はなぜか現実感が希薄で，悠然と構え，この決定的一瞬を写真に撮らなくてはいけないと，シャッターを押した。でも，妙なことにフィルムには何も写っていなかった。このときの落ち着きぶりは私の自慢話のひとつだったが，熊との遭遇は作り事だろうとか言われたりして，ろくな反応はなく，実に不本意な思いだった。写真ですら，ポルトガルの漁師小屋を撮ったものを除いてあまり感心されたことはなかった。きみの話ならいつ会っても面白いと言われても，とりたてて嬉しくはない。

迷い道について最も忘れがたい出来事がある。ある年の大雪山行と同じく9月の半ば，アルジェリアのサハラ砂漠で道を外れ，遭難しかかったことだ。

私は砂漠の中に忽然と姿を現わす城塞都市のガルダイアに滞在していた。首都アルジェから南に約 500 キロ，陸路を 8 時間半ほどかけて到着したのだった。ガルダイアは世界遺産になっている「ムザブの谷」の 5 つのオアシス都市のひとつである。

「ムザブの谷」をこよなく愛していたル・コルビュジエの設計した建築が，いかにこの都市群の伝統的な建物とイメージの相似性を持つかという映像番組を制作する，フランス・スイス合同の取材チームに加えてもらったのである。パリで在外研究中の建築史専攻の研究者 M 君の紹介だった。M 君も同行を希望していたが，日本に一時帰国する急用ができて不参加となった。

どの城塞都市も小高い丘の上に向かって建物が密集し，入り組んだ狭い迷路のような坂道が張り巡らされている。熱気が吹き抜け，香油の匂いが肌を包み，足音が壁に響く。角を曲がると急に視界が開け，頂上に聳えるモスクの尖塔ミナレが，青空を背景に街を見下ろしている。

ル・コルビュジエは，ミナレにとりわけ魅せられ，パリからたびたび「ムザブの谷」を訪れて，その優美な曲線があらたな設計のヒントになった。私は後に述べる理由から途中で帰ることになり，取材チームに同行できたのは，フランス・ロンシャンの礼拝堂建築の発想の元になったという，オアシス都市のひとつエル・アトウフのシディブラヒム・モスクだけだった。築 700 年を超える建物で，堅牢な白壁と流れるような美しい曲線の造りだが，壮麗さとは無縁の実に質素な建物で，清貧の佇まいがあった。

迷路のような細く曲がりくねった坂道を歩くと，自分の心身が感応体となって空気に溶けていくような愉悦を覚えた。ただし，こうした「ムザブの谷」の城壁都市へ入るには，現地の元締役でもあるガイドの同行が義務付けられ, 厳守すべき禁止事項もある。その中に, 女性の写真を撮ってはいけないという決まりもあった。女性たちはアバヤと呼ばれる衣装を全身にまとい，既婚者は両目を，独身の者は片目だけを覗かせている。私は微風のように静かな足取りですれちがった母娘と思われる二人連れに魅了され，カメラを向けた。すかさずガイドの厳しい声が飛んできて，写真の消去を命じられた。

しかし私が述べたいのは，アルジェリアでのこうした出来事ではない。夜の砂漠のことなのだ。ガルダイアに着いて 3 日目の夕方，私は砂漠に沈む太陽の写真を撮りたくなって，取材チームの借りていた三菱パジェロに乗り込んだ。もとより遠出はする気はなく，ほどよい撮影地を見つけたならば，急ぎ帰る予定だった。ガイドの同行がないと移動が許可されないこともしっかり念頭にあった。

しばらく広大な砂漠を貫く道路を進むと，左手に小高い丘が現われ，斜面は陰になって灰色に沈んでいるが，稜線は黄金色に縁どられ，山際には風にあおられて金粉の帯が流れていた。

街道からそこへ向かう細い脇道があり，一瞬ためらったが，思い切ってハンドルを切り，アクセルを踏み込んだ。進むとまずい，迷い道で帰れなくなるぞ，という自覚はあったにもかかわらず，迷うことに挑むような倒錯した気分に衝き動かされた。

私の迷走ぶりが不審に見えたのか，ガルダイアに向かうトラックが警笛を鳴らして過ぎていった。

目視の距離を裏切り，丘はなかなか近づかず，斜面は翳りを広げていく。これは蜃気楼かもしれないと思ったとき，砂漠の丘はいっそう夕陽に燃えているように映った。

私は戻ることに決め，車をUターンさせた。ところが，背後に広がる砂漠も燃え立ち，帰路が黄金の砂地の中に消えている。おおよその見当をつけて徐行したものの窪みにはまって車体が左右に揺れ，砂漠の地平が浮いては沈んだ。それでも東に向けて車を走らせているうちに，意外に

早い夜の訪れがあった。

私は車を止め，塩っ辛いクラッカーと炭酸水のペットボトルで空腹をおさえた。

夜の砂漠がどれほど賑やかなものか，想像すらしていなかった。私は車の外に段ボールを重ね，仰向けに横たわって満天の星を見ていた。

すると聞こえる，聞こえる，ジージージーチー。何の虫だろう，ジージージーチー。鳴声がかすかに，しかし周りに小さな集落をつくっているように，たくさん聞こえるのだ。ジージージーチー，ジージージーチー。こんな砂漠の不毛な地でも命の気配がある。息遣いを虫たちの声に合わせるように整え，私は耳を澄ました。

安堵，嬉しさ，不安，焦燥……，それらのどれでもない。私は身体の底のほうから，まだ名づけられない何やら見知らぬ感情がこみあげてきて，涙が流れだし，嗚咽が止まらなくなった。どれくらい時間がたった頃だろうか，私はいつの間にか寝てしまい，気がつくと虫の声がぴたりと止んでいる。薄闇に目を凝らすと，砂地に数カ所ほどまばらな草のかたまりが見えた。

大地はまだ闇に沈んでいるが，遠くの地平線のあたりがほんのり明るく，青みがかっていた。東の空から上空に向かうにしたがって，濃い青の諧調に変わっていき，西の空はまだ闇だった。空はゆっくり明るい青に変化していくのだが，私は不動の時間のなかにいるような気がした。そのとき，はっと記憶が動きだす気配があったが，記憶ではなかった。

砂漠の彼方から白い点が左に大きく迂回しながら，慎重に道を探すように近づいてくる。やがて小型トラックがパジェロの横に止まり，ガイドを先頭に二人の屈強そうな男が降りてきた。意外にもガイドは険しい顔を見せず，笑みを浮かべていた。それがかえって，威圧的な雰囲気を放っていた。後で知ったことだが，前日に警笛を鳴らして通過したトラックの運転手が，私の不審な走行ぶりを目撃して通報したのだった。

その日の午後，私は空路でアルジェに送還された。

〈寸感〉

アルジェリアの「ムザブの谷」は，世界遺産に指定されている。地上で最も魂を虜にする坂道の路地が，迷路のように集中する城塞都市として，私はかねてより旅心を誘われてきた。いささか常軌を逸した行動は論外として，笠間に羨望を覚える。

しかしこうした砂漠の都市の探訪もさることながら，今ここで気になるのは，笠間保自身の人物像だ。現在の住まいはもはや「杉並の安アパート」ではないはずで，放浪状態であるにしても拠点はどこか。一人息子と 25 年間も会っていないとは，どのような事情によるのか。若気の至りとさらっと書いてあるだけの結婚生活の相手はどのような人だったのか。また，「ムザブの谷」に同行するはずだったパリの建築史専攻の「M 君」とは，旧友なのか。

あれこれ推測しながらも，一方でどうでもよい気分になった。それでもやはり心に懸かるものがあった。正直言うと，2 日ほど「ブラック・ノート」の人物情報のありそうな文章に当たりをつけて追ってみたのだが，案の定，いつもと異なる読み方をしたせいか，注意力にロックがかかり，頭に入ってこなかったのだ。結果的に辿り着いた思いは，またもや「コピー」だった。

「ブラック・ノート」には，体験記，創作文，感想メモ，箴言，詩句，引用文などが入り混じっている。そういう文章にあって，見え隠れする笠間保とおぼしき「私」という一人称の人物は，一貫性を欠き，矛盾すら散見する。しかし堅固なものと言い難いにせよ，表現の主体としての基調は維持しながら，いったん書かれたイメージの揺れや，齟齬があったりしながら，新たな「私」の像がそのつど

浮かび上がる。人称を変えた場合も同じだ。書くという運動によって，自己像がコピーされ複数化していくのである。意想外の逸脱が生じ，いわばコピーミスのような変異が起こって自己が増殖する。「ブラック・ノート」の記述主体としての笠間保は，「私」という人称であれ，他の人称であれ，さまざまに変異した彼自身なのであり，複数化された像のすべてなのだ。

こんなことをつらつら思い巡らしているうちに，今日も深夜になった。まさしく草木も眠る丑三つの刻。しかし，私には眠りがやってこず，想像の砂漠が闇の中に広がっていく。ジージージー，チー，ジージージー，チー，名の知れぬ虫たちがいっせいに鳴きだす。

27 「歴史上もっとも醜悪なアイロニー」

（5 冊目，23-26 ページ）

特に日付の記録はないのだが，大原三八雄編『世界原爆詩集』（角川文庫）を借りたという断り書きの次に，「歴史上もっとも醜悪な冗談」と題する文が続いている。

〈あらまし〉

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分，広島。4 歳で原子爆弾に被爆した，小学校 4 年の少女の詩に『世界原爆詩集』で出会った。庄崎洋子「げんしばくだんのとき」。

おかあさんといっしょに
あみものをして遊んでいた
ぴかぴかと火のようなものが
いえにおちてきた
まどがあおくなっていた
屋根がとんできた
わたしはおとうさんに
おんぶしてにげました
おそろしかった
四つのときです
まえおったところ
広島市天満町
いまおるところ
南かんおん町

声に出して読みたくなる日本語では断じてない。黙読こそふさわしい。最初からゆっくり詩句を追い，最後の 4 行「まえにおったところ」にいたると，そのそっけない表現がにわかにただならぬ気配と凄みを帯びて，名づけようのない感情がしくしくとこみあげてくる。

どうしてか。4 歳のときに父母とともに住んでいた場所は，「広島市天満町」と漢字で書いてある。しっかり記憶に刻むように漢字を覚えたのかもしれない。いま住む「南かんおん町」はどうしたわけか，あっさりひら仮名交じりだ。「まえにおったところ」と「いまおるところ」の対比の背後に，痛ましい現実が隠れているに違いない。何の覚悟も準備もなく，一瞬のうちに「広

島天満町」の親子の日常は激変した。

4 歳で被爆した「庄崎洋子」という名の少女のその後の運命はわからない。投下された原子爆弾ウラン 235 のアメリカ軍による「愛称」は,「リトルボーイ」であった。この対置は,歴史上もっとも醜悪なアイロニーというほかはない。

〈寸感〉

文の最初のページの欄外に，いつもと違った丸っこい字で,「k・n さん，いまはげ」と記してある。文章を追いながら既視感があったので，途中で気づいた。「k・n さん」とは私のことで,「いまはげ」とは, 拙著『いま, きみを励ますことば』なのだ。ただし, 貸出のノートにはこの本の記録はなかった。ほぼ私の文をなぞって書いているのだが，意外なほど違和感がない。もはや内容は覚えてないということもあるが，ここは前に来たことのある場所だなーと呟きつつ，あたりの風景を眺める気分に近い。「ブラック・ノート」を拾い読みしてきた限り，笠間保は予期していたよりも「k・n さん」の本を読んでいない印象がある。これから先はどうなるか判らないが，すでに書いたものの模写よりも，これから私が書きたいと思っていること，書く可能性のあることを先取り的に文章化されるほうが，興を削がれる。23 の「喫茶店にて」がややそうした思いを引きずっているかもしれない。

そこで書き足しておきたいアイロニーがある。『世界原爆詩集』は，すぐれたアンソロジーで，イギリスの詩人エドマンド・ブランデンの詩「ヒロシマ」も収載されている。後にダンテの『神曲』の名高い翻訳を残した寿岳文章による日本語訳だ。「かの永劫の夜をしのぎ／はやもいきづくまちびとの／……うらみも言わで，颯爽と／立ち上がりたる，心意気」といった声にのせるにふさわしい吟唱調は，文字どおりアイロニカルな事態なのだが，戦意高揚の勇ましい軍歌を思い起こさせる。声高な詠嘆の対極にあって，小学校 4 年の少女の詩は，断ち切られた日常の苛酷をはるかによく伝え得ていると思う。

28 「自転車の男が叫んだ，見ろ，月だ，月だ」

（28 冊目，6，7 ページ）

一週ほど間が空き，歯医者の待ち時間にノートを開くと，旅のエピソードが目に入った。先のアルジェリアと連続した旅程かと思ったが，こちらは新年の話で，季節が合わない。タイトルは「ローマの月」も考えたらしいが，傍線で消してある。全文を示す。

「自転車の男が叫んだ，見ろ，月だ，月だ」

ローマ，1 月 2 日，夜。めざしていたレストランテが閉店していたので，二軒目の店に向かった。カンディア通りから裏道に入ると，その一角だけ店内の明かりが街路に広がっている。開店時間の 19 時半を少し回っていたが，すでに満席に近い混み方だった。ベルギー在住のルネッサンス音楽の研究者とカトリックの修道女の二人の日本人女性を含め，私たち四人は調理場の見える席に案内された。

料理が一通り進んでから，生ハムのメロン添えの味が忘れがたく，追加で注文した。ところが，テーブルで支払いが済んだあと，私たちはこの代金が請求漏れであることに気づいた。食事の楽しさを損ないたくないと誰もが思い，迷いなくウエイターに間違いを指摘し，不足代金を渡した。一瞬，彼はとまどいの表情を浮かべたものの,「グラーチェ，グラーチェ」と晴れやかな笑みを

浮かべて応じた。

テーブルを離れるとき，隣の若いカップルが私たちに話しかけてきた。ローマ在住の二人の女性が内容を教えてくれた。

――あなた方は，日本人ですか？　さきほどから，私たちは感動しています。ブラボー！　わざわざ店の計算間違いを指摘して払っていくなんて，信じがたいことだ。すばらしい。

はからずも私たちはローマの市民に，日本人への尊敬の念を喚起したことになる。正直に言わないと気になるというモラルの感覚はとても大切だ。しかし，「世界からリスペクトされる日本」などという居心地の悪い政治的下心のあるキャンペーンなどに，私は関心がない。そのことはともかく，歩きながら，これは必ずしも美談などにならないとあれこれ思いが錯綜した。食後のデザートを一品追加して満腹感を増した程度の行為くらいに考えたほうがいい。

夜が深くなっていく。修道院の営むバチカン脇の宿に戻るため，敷石のすり減った細道を進み，カンディア大通りに戻ったところで，正面から一台の自転車が私たちの間を通り抜けていった。紫色のジャンパーを着た中年の男が，高いサドルに低いハンドルの車体に身をかがめている。

男は行き交う人々を避けながら，右手を空に向け，「ルナ，ルナ」と甲高い歓声をあげた。私にも聞き取れたイタリア語は，「ルナ」（月）のみだが，同行者に確かめると，「見ろ，月だ，月だ，新年の満月だぞ」と叫んだという。

奇矯な声をあげる紫のジャンパーの男に，剣呑な事態を引き寄せる気配はなかった。月を指さす歓呼の姿は，365 日間いつもお祭り状態のこの都市の賑わいと喧騒に，しっくりと溶け込んでさえいるように思えた。人々は自転車に道をあけるだけで，男の声には従わない。

「ルナ，ルナ」の晴れやかな伝令が遠ざかる。男の指差す南の空には低く，右上弦にかすかな欠落のある巨大な赤い月が昇ってきていた。右側にはサン・ピエトロ寺院の尖塔の影がせまっている。

私は石畳の道をやや進んでから，もう一度振り返った。紫色のジャンパーが広がり，自転車はゆるやかにバチカン市国の高い壁を這い登り，満月の輝く夜空へと消えていった。

〈寸感〉

『地球の歩き方・ローマ』とか，何冊かイタリア関係の旅行案内書が貸出ノートに記録されていることを思い出した。どれも 10 年以上前の旧版のはずで，役に立ったのだろうか。最後の場面など，シャッターチャンスはなかったのか，などという感想はお節介にすぎないだろう。

ところで，文中の「食後のデザートを一品追加して満腹感を増した程度の行為」の比喩がどうもすっきりと了解できない。要するに自己満足の行為でしかないと言いたいのだろう。必ずしも「美談」にならない可能性があることは理解できる。たとえば，ウエイターが不足分の金をすぐさまポケットに入れ，個人的なチップとして受け取った場合だ。日本人の客は勘定不足の申告を正直に行なう傾向があるとなれば，店員たちはわざと計算間違いをして稼ぐことになるかもしれない。しかし，何やら後味のよくない推測になってしまった。

29 「ネズミ算式」

（8 冊目，15-28 ページ）

言うまでもないことだが，私にも日々の生活のルーティンはあり，そうした日常の中に不測の事態も起こる。ここ 1 週間に限っても，一時停止を無視してきたバイクを避けようとして，私の車は電柱

に接触し自損事故を起こしたり，チャージしたばかりのパスモを紛失したり，フェンスの間から保育園の庭で遊ぶ園児たちを眺めていると，園長に不審者と誤解されてしまったり，あれこれと不本意な変化に事欠かない。この程度の偶発事でも，こつこつ書き記していけば，私なりの「ブラック・ノート」になるだろうか。あれこれ考え始めたら，いくら少閑の読書代わりと言っても，当の「ブラック・ノート」を開くのが億劫になった。それでもしばらくすると，禁断症状などという大げさな習癖ではないが，また飽きもせず読み始めたりする。目に入ったのは，「ネズミ算式」という題のやや冗漫な文章だが，いつものとおり語りの人称は変えずに記す。

〈あらまし〉

毎年というわけではないが，5 月の連休になると上野の不忍の池畔で開かれる骨董市に出かける。おおよそ 20 店舗ほどのテントが並ぶ。古陶磁器，古着の店が多いが，玩具の専門店，芸能専門の古書店などもある。そうした中にあって，何を中心に売りたいのか不明で，ジャンル分けなど無視したガラクタ物ばかりが並んでいて，覗くのが楽しみな店があった。

店主は長い白い顎髭を垂らして，いつも店の奥に置物のように鎮座していた。ところが，いったん品物の説明を求めると話が長くなり，入手の由来の解説が物語風になったりする。立派な顎髭の似合う老賢人のように，口調はゆったりとして重々しい。

例えば，20 世紀初頭にアメリカで博徒の所有していたトランプの場合がそうだった。蔓草模様の中央部に，微細な長短の細工を施した数字が判別できるらしく，カードを一枚一枚見せながら，いかさま師が実際に使っていたものだと説明した。アリゾナのグレンデールという場所で開いた賭場でインチキがばれ，両手の指をハンマーで砕かれたいきさつも，さも見てきたように話した。しかし，いくら目を凝らしても，私には微細な細工など見抜けなかった。老店主にだって判別できたかどうか，怪しいものだと思う。もちろん，そんなトランプ・カードなど買いはしなかった。

実際に入手したものは，ドイツの 1930 年代のカメラ「ローライフレックス」のツアイスのレンズ付きだった。中古カメラ屋の相場よりも一桁も安く，手回し蓄音機などと一緒に雑然と置いてあった。事情を訊ねると，壊れていて使えないが，修理できれば，お買い得だろうという。戦前に東京のドイツ大使館から来た外交官が，霞ケ浦に車ごと転落した。本人と同乗者はともに助かったものの，持ち物は水没し，カメラも水濡れ品になってしまった。購入したそのカメラは，何度か修理を試みたものの作動せず，結局はオブジェに収まっている。

珍しいような珍しくないような逸品も一つ買い求めた。ただし，不燃ごみに出したので，今は手元にない。5 年ほど前，店に寄ったときのこと，ガラクタの店にしては，古くもないし，希少とも見えないパソコン用のワイヤー付きの黒いマウスがあった。最初期のソニーのウオークマン，修学旅行専用車「日の出号」のオレンジ色の鉄道模型，大きな天眼鏡の間にひっそりと置かれていた。隙間に首を突っ込んで尻が出ている，まさしく黒っぽいネズミに見えた。なぜこんなつまらない物が商品になるのか分からなかった。

わたしにも分からんのです，と老賢人らしからぬ返事をした。ネズミ算が得意な珍しいマウスらしいが，どうも増やすのは数じゃないらしい，じゃ何を増やすのかと気になるわけだが，わたしはパソコンなど縁がないから知らん。鎌倉に住んでいた劇作家の遺品らしい。だが，特にいきさつは聞いていない。100 円の値をつけているが，欲しければ金は無用，持っていけばいい。

パソコンの付属物のマウスはマウスでしかなく，店主の説明も不可解ではあったが，それでも

私は捨てられた小動物を引き取る気分で貰い受けてきた。普段はワイヤレスのマウスを使い慣れているので，しばらく放置した。それでも，老店主の謎めいた話が気になって，黒ネズミの尻尾をパソコンにつないでみた。カーソルが動き，取り立てて変わった兆しはない。

翌朝，店主のとまどいながらも重々しい話しぶりを思い出しながら，黒マウスを使うと，カーソルはこちらの意志に反する緩い動きを示す。からかい半分で，すべて平仮名で書いてみた。

「おもいどおりにつかえないまうすなど，はやくえんをきるにかぎる。それでも，いちどくらいはつきあってやろうと，いをけっしたものの，どのようなぶんでもそうだが，はじめかたにまよい，まうすをにぎり，しばしこくうをみつめて，がめんにもどり，またまよいつつ，とりあえず，かきだしてみると，えたいのしれないふきつなかたまりがわたしのこころをしゅうしおさえつけていた，などとかじいもとじろうのれもんのぼうとうぶんになってしまった」

この文全体をカーソルでなぞり，フレーズごとに変換してみる。

「思い通りに使えないマウスなど，早く縁を切るにかぎる。それでも，一度くらいは付き合ってやろうと，意を決したものの，どのような文でもそうだが，始め方に迷い，マウスを握り，しばし虚空を見つめて，画面に戻り，また迷いつつ，とりあえず，書き出してみると，えたいの知れない不吉な塊が私の心を終始圧えつけていた，などと梶井基次郎の檸檬の冒頭文になってしまった」

特に変わったところはなく，順調に変換されている。常用ではない「圧えつけて」の「圧」が原作どおりに置き換わり，標準的な表記の「抑えつけて」にならないところなど，期待以上のものだ。そう思った瞬間，私はマウスを掌に包んだまま何気なく左クリックした。するとカーソルが勝手に跳ね，前とは打って変わった素早い動きで，文字面の上を走り抜け，新たに変換した文を映し出した。

「いらいら，やきもき，じりじり，思い通りに動かず，働かず，使えない，役立たずのポンコツの老朽マウスなど，おさらば，バイバイ，さようならと，ぐずぐずせずに，一刻も早く縁をばっさり，いさぎよく切るにかぎる。それでも，まあ仕方ないので，しぶしぶと一度くらいは付き合ってやろうと，どんよりと意を決したものの，名文，達文，悪文，駄文，あれやこれや，どのような文でもそうだが，さあ書くぞと意気込む始め方に，あーだ，こーだ，これでどうか，まだだめか，うろうろ，とぼとぼ迷い，手を握りではなく，マウスを握り，いいか，でも，やはりだめかと思いめぐらし，知恵をしぼり，しばし虚空を見つめて，溜息を洩らし，よし行くぞと画面に戻り，性懲りもなくまた迷いつつ，まーいいか，こんなもんでと諦め半分で，とりあえず，おう，いいじゃないかと，意外な手ごたえ，傑作だと，また虚空に向かって呟いて，喜悦とともに書き出してみると，〈えたいの知れない不吉な塊が私の心を終始圧えつけていた〉とは，何だ，くそ，ぬか喜びか，梶井基次郎の『檸檬』の冒頭文になってしまった。きょうは止めた，酒飲んで寝る」

黒マウスの隠された特技はこれだったのか，と私は思った。これを使うと，文に修飾語が自動的に増えていく。意味のある語句かないかに関係なく，文を賑々しく増殖させるのだ。しかし，ネズミ算とは大げさで，それほど派手な働きはないように思える。かつては，そうであったが，今は古くなって余力を残していないのかもしれない。ことによると，かつての持ち主の劇作家が使い尽くしてしまったのだろうか。

私は黒マウスに呼び掛けて，試しに短い新たな文を入力してみた。

「風が遠くから雲を運んできたとき，光は雲層を照らし出した」

カーソルを動かし，変換指示をした。思案気な間があって，文章があらわれた。

「風がはるか遠くから，密集した雲々を長い木霊を響かせるように，ゆっくりと運んで，き，た，とき，深く，青い，空から，き，ら，き，らと降り注ぐ光は……，雲層の断面を，まる，で……襞を持つ白く……ふんわ…ド，ドレ，スの……よ，うに，照らし……だ，だ，だ，照らし，照ら，照ら，照……」

黒マウスは作動しなくなった。電池を入れ替えても，カーソルはまったく反応しない。「照」という字を最後に命脈尽きてしまったようだ。かつての「ネズミ算式」の文章増殖の活力を回顧し，これを名残と「照らし」出そうとしたのかもしれない。これまでどれほどの酷使に耐えてきたのか。嬉しくも私のところに辿り着き，わずかに残った「ネズミ算式」の文飾の力を見せてくれた。しかし，しょせんマウスはマウスに過ぎない。私の湿っぽい感慨はそこまでだった。黒マウスは不要になった延長コードや携帯の充電器といっしょに，不燃ごみとして処分した。

〈寸感〉

貸出ノートに記録はないのだが，「ネズミ算式」の着想の元になっている小説はほぼ推測できた。ジャック・フィニィの短編「従兄レンの驚異の形容詞壺」（田村義進訳）ではないだろうか。

従兄のレンは『ネイチャー』誌のコラムを気乗りしないまま書いているのだが，性に合わない仕事の憂さ晴らしに，質流れの店に立ち寄っては珍しい品を買いあさっていた。ある日，レンが手に入れたのは洗練された形の錫の合金製の壺だった。

翌日，レンがコラムを書いているとき，原稿用紙のそばに壺を置くと，文章がすっかり変わってしまうことに気づく。「妖精の森の宝石を散りばめたような梢は，寂として静まりかえっている」と書いたはずが，「森の梢は静まり帰っている」となる。この古い壺は，不思議な働きがあって，文章に近づけると，過剰に意味を強調した形容詞（ときに副詞も）を吸いこんでしまう。文章との距離の加減によって，壺は重い形容詞から軽い形容詞へと，まるで掃除機のように吸うのだ。レンはこの形容詞壺を磁石のように動かしながら，コラムを書き続けると，引き締まった文章が評判を呼び，読者の数も増えていった。

壺は一週間で満杯になり，窓から街に向けて散布する。舞い上がった形容詞や副詞は，紙吹雪となって流れて行き，ときに買い物帰りの婦人の物価上昇を嘆く会話に紛れこみ，「うるわしき家計は，きらめく，きかん気な，寓意的火の車ですわ」となったりするのだ。

ジャック・フィニィの「従兄レンの驚異の形容詞壺」は，『ことば四十八手』（井上ひさし編，新潮社）に収録されている。笠間が意図して貸し出しノートに記録しなかったのか，それとも忘れたのかは判断できない。したがって，「ネズミ算式」の黒マウスは，「鎌倉に住んでいた劇作家」の持ち物だったと述べているが，井上ひさしのことをイメージしていたのか否かも不明だ。

［続く］

執筆者について——
中村邦生（なかむらくにお）　1946 年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に，『転落譚』，『チェーホフの夜』，主な批評に，『未完の小島信夫』（共著），『『罪と罰』をどう読むか』（共著）などがある。